

住用マングローブ林：潮水に生い茂る

奄美大島の南東部の海岸にある、住用マングローブ林は、0.7 平方キロメートル（約 175 エーカー）で、日本で 2 番目に大きなマングローブ林である。マングローブ林とは、干潮時に陸地になり、満潮時に水面となる潮間帯に広がる林で、植物にとって有害である塩分に耐える事ができる様々な樹木や低木の総称である。マングローブは沿岸の生態系には重要な役割を持ち、風や波の侵食から海岸を守っている。多くの鳥やカニ、小魚の様な海洋生物の生息地でもあり、ろ過として水質を改善している。また、マングローブは豊富な炭素蓄積機能を持つため、気候変動において重要な存在である。

有害な環境への適応

マングローブ林は、広葉樹林ほど種類はないが、適応力は高く、日々海水に浸り、高い塩分濃度を持つ土壌でも生き延びる独自の方法を発達させた。根はコルクのような層をもち塩分をろ過し、残った余分な塩分は葉から排出し、黄色くなり落ちる。いくつかの種類は泥から露出した膝根を持ち、通気組織から空気を吸収する。マングローブ林は、個性豊かな生物と生態系を観察するのに適している。